opusdei.org

キリストの聖体

聖ホセマリアによるキリスト の聖体の祭日の説教(1964年 5月28日)

2024/05/31

永遠の生命のパン

「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です」 [1] と言われるように、キリストの肢体となった私たちの中におられるイエスを、聖体のうちに見つめたいものです。神が聖櫃の中に留まる決心をされたのは、私たちに食物を

与え、強め、神に近いものとし、私 たちの努力や業を効果あるものとす るためでした。イエスは、同時に種 蒔き人であり、種、そして種蒔きの 結実、つまり永遠の生命のパンでも あります。

絶えず繰り返される聖体の奇跡において、イエスの生活そのものが再れていると言えます。完全な人である天と地の主は、を全な人であるとなって自ら愛をとは、二千年も前から私たちのですが、二千年も前からですが、二千年も前のようですが、によります。ではありません。愛があれば長い時間に過ぎ去ってしまうがは瞬く間に過ぎ去ってしまうではあります。

アルフォンソ賢王がガリシア語で書いた見事な賛歌の一節が頭に浮かんできます。ある素朴な修道士が、たとえ一瞬でもよいから天国を垣間みたいと聖マリアに願った伝説のこと

です。聖母はその願いをお聞き入れ になり、善良な修道士は天国に上げ られました。ところが、彼が修道院 に戻ってみると、顔見知りの人は誰 もいなかったのです。彼には一瞬に 思われた祈りが、実に三世紀も続い ていたからです。三世紀と言っても 愛する心にとっては束の間にすぎま せん。聖体において二千年も待って おられる主のことも、このように考 えると納得できそうに思えます。私 たちを愛し、探し求める主、わがま まで利己主義で、心変わりしやすい けれども、無限の愛を見出して主に 完全に捧げ尽くすことのできる私た ちを、ありのまま愛する主が待って いてくださるのです。

イエス・キリストが地上に来られ、 そして聖体において人々の間に留ま られたのは、愛のため、そして愛す ることを教えるためでした。「世に いる弟子たちを愛して、この上なく 愛し抜かれた」^[2]という一節をもっ て、聖ヨハネは過越祭の前日に起 こった出来事の冒頭を飾っていま す。そして、その晩の様子を聖パウ 口は次のように描写しています。 「主イエスは、(…)、パンを取 り、感謝の祈りをささげてそれを裂 き、『これは、あなたがたのための わたしの体である。わたしの記念と してこのように行いなさい』と言わ れました。また、食事の後で、杯も 同じようにして、『この杯は、わた しの血によって立てられる新しい契 約である。飲む度に、わたしの記念 としてこのように行いなさい』と言 われました」^[3]。

新しい生活

新約が成立する簡素であり厳かな瞬間です。イエスは、古い掟を廃止され、自らが私たちの祈りと生活の中味となるであろうことをお示しになりました。

今日の典礼の中にみなぎる喜びを味わってください。「響き渡る高らちな称賛を歌え。喜びと尊さに満ちたものであれ」「4」。新しい時の訪れてものであれ」「古い過越が終わってもい過越が定められた。古い過越が定められた。音には終わって、新しい式に席を追い出た。こうして実体が影を追い出た。とが闇を消し去った」「5」。

決定的なマンナである聖体で強められたキリスト者にとって、永遠の幸福はすでに始まっています。古いものは過ぎ去りました。古びたものなど、必要ではありません。「心も、言葉も、行いも」 [9]、私たちにとって全く新しいものでありますように。

これが〈新しいよい知らせ〉です。
〈新しいよいのは、かつではというのはど深遠なたほど深遠なからいまなからないあるのは、するといいのもであるとといるのは、の中でることがもしいので、のはいいのがあるとといいようのは、いいようのは、いいようのは、いいようでは、いいようでは、いいようにといるがらです。

言葉とパンにおけるイエスとの交わり

イエスは祭壇のいとも聖なる秘跡に 隠れておられます。私たちが敢えて 主と交わり、主と一つになるため に、イエスは私たちの糧となってく ださったのです。「わたしにつな がっていない人がいれば、枝のよう に外に投げ捨てられて枯れる | ^[10]と 言われましたが、キリスト信者には 何もできないと決めつけられたので も、困難に困難を重ねてキリストを 探し求めるよう要求されたのでもあ りません。私たちがいつでも主に近 づくことができるようにと、人々の 間に留まってくださったのです。

ミサ聖祭の犠牲のために祭壇の前に 集うとき、聖体顕示台に安置された 聖体を眺めて黙想するとき、あるい は聖櫃の中に隠れておられる主を礼 拝するとき、再び信仰を燃え立た せ、人々の傍におられる主の新たな 現存について考え、神の優しさと愛 の深さに心打たれることでしょう。 「彼らは、使徒の教え、相互の交わり、パンを裂くこと、祈ることに熱心であった」[11]。初代信者の生活について、聖書にはこのように記されてあります。信者たちは、使徒たちの信仰と完全な一致を保ち、聖体にあずかり、心をひとつにして祈っていました。信仰とパンと言葉における集いだったのです。

聖体は人々の霊魂におけるイエスの 現存と世界を支える力の保証であ り、世の終わりに、父である神、子 である神、聖霊なる神、つまり唯一 の神の至聖なる三位一体の玉座、天 の住家に永遠に住まわせようとい う、救いの約束の確かな保証でもあ ります。キリストご自身と、パンと ぶどう酒の外観の下に実際に現存な さるイエスを信じるなら、私たちの 全信仰を表明することになるので す。言葉とパン、祈りと聖体におい でになるイエスと絶えざる交わりを もたないで、キリスト信者らしく生

きることができるとは思えません。 しかし、何世紀にもわたって代々の 信者が聖体への信心を具体化してき た理由はよくわかるのです。あると きは公に信仰を宣言する大衆的な行 事をもって、またあるときは、教会 内の神聖で平和な雰囲気のうちに あるいは心の奥底で沈黙のうちに あるは代々聖体への信心を表してき たのです。

何を差し置いても、一日の中心であ るミサ聖祭を大切にしなければなり ません。よい準備をしてミサ聖祭に あずかるならば、一日中、主が働か れたように働き、主が愛されたよう に愛するために、主の傍から離れま いとする意気に満たされて、当然の ように主のことを思い続けるので す。そうすれば、主のもう一つの心 遣いに感謝するようになることで しょう。主は、ミサの犠牲が捧げら れるときのみ祭壇に留まってくださ るだけでなく、聖櫃の中に安置され る聖なるホスチアのもとにいつも現 存することになさったのです。

私にとって、聖櫃は常にキリストが おられる落ち着いた静かなベタニア であります。主の友であるマルタと マリア、ラザロが単純率直に主に語 りかけたのと同じように、聖櫃の前 で私たちの心配事や苦しみ、希望や 喜びについて主にお話しすることが できるのです。ですから、どこかの 街角に、遠くからでも教会の塔を見 つけるととても嬉しくなります。そ こにはもう一つの聖櫃があるから、 また、秘跡におられる主と一緒にい たいという気持ちにかられて、聖櫃 に思いを馳せる機会となるからで す。

聖体の豊かさ

主が聖体の秘跡を制定されたのは最後の晩餐のときでした。聖ヨハネ・クリゾストムは、「夜であったことにより、時が満ちたことを明らかに

したのである」 [12] と言っています。 世界は夜の闇に包まれていました。 古い儀式や、神の無限の慈悲である 古いしるしは過ぎ去り、新たな過 越、真の夜明けが訪れたからです。 聖体の秘跡は夜の間に制定され、復 活の朝を前もって準備しました。

私たちの生活も黎明を迎える準備を しなければなりません。はかないも のや危険なものはすべて、また、失 望、不信、悲嘆、卑怯など役に立た ないものはすべて捨て去らなければ ならないのです。聖体は神の子ども たちに神的な新しさを与えたので す。従って、気持ちや振舞いを一新 し、「心を新たにして」[13]、この恩 恵に応えなければなりません。私た ちには、活力の新たな原理である強 力な根、主に接ぎ木された根が与え られました。今日の、そして永遠に 続く〈パン〉を持っている私たちが 古いパン種に戻ることはもはやでき ない相談なのです。 今日の祝日に

は、世界中至るところで信者が聖体 行列に加わります。主はホスチアの 隠れて、かつての地上での生活の生活のように、通りや広場を通りを通り け、主に会いたいと望む人々には 受け、たようなない人々にはする のようにイエスは、〈ご自分でする の間〉に、お現れになるので がよいのでしょうか。

愛の外的表現は、心から生まれなまれならず、また、信者らしいはないなければないなければなって継続しなければなって継続しなければないの御体を拝領してまを行いる主のののとのであればならないがららず、私生ではないができるよう、もませんができるよう、真実にしてしてい適切であるべきです。そ

舞いは、主の業や生活を想起させるもの、つまり、「キリストの良い香り」[14]を振り撒く、首尾一貫した、的確で効果的なものでなければならないのです。

聖体行列によって、キリストは津々 浦々に来てくださいます。せっかく キリストが来られるのですから、そ の日限りの行事で終えてしまった り、聞いては忘れ去る騒音であった りしては残念なことです。イエスが お通りになるとき、日常の些細な事 柄にも主を見つけるべきことを思い 起こしましょう。この木曜日の荘厳 な行列とともに、黙々とした、慎ま しい日常生活という行列がなければ なりません。信者は人々と変わらな い毎日を送りますが、神的使命と信 仰を受ける幸運に恵まれて、再び地 上に主の指針を告げ知らせなければ ならないのです。私たちが過失や惨 めさや罪から解放されることはない でしょう。しかし神は人々と共にお いでになります。わたしたちは主が 絶えず人々の傍らをお通りになるこ とができるよう主の道具の働きをし なければなりません。

聖体を愛する心をくださるよりなである。 を受する心をでするがななりのである。 を主との個人のの場合をである。 を主き、でするいとのであるがないのである。 を表れるようではないのである。 をでするようではない。 をでするようではない。 をでするようである。 をでするようである。 というのではない。 に、びてのキャベそげもストの約束が実現するのです。

(聖ホセマリア・エスクリバー『知 識の香』151-156)

- [2] ヨハネ13・1
- [3]ーコリント11・23-25
- ^[4]続誦ラウダ・シオン
- [5]同
- [6]
- [7]同
- ^[8]聖アウグスティヌス『ヨハネ福音 書についての注釈』26, 20 (PL 35, 1616)
- ^[9]賛歌サクリス・ソレムニス
- ^[10]ヨハネ15・5
- [11] 使徒言行録2·42
- ^[12]聖ヨハネ・クリゾストム『マテオ 福音書についての説教』82,1 (PG 58, 700)
- ^[13] □ − マ12·2

______コリント2·15

^[15]ヨハネ12・32

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-sekkyo-seitai/ (2025/12/11)